

# 児童文学批評というたおやかな流れの中で ⑤

—いま児童文学は3・11後の絶望を「かさねちゃん」と重ね合わせ

決して「希望」や「絆」への道に行かない方がいい—

細谷 建治

## \* 評論研五〇〇回

ぼくらが月一回のペースで休まずやってきた児童文学評論研究会が、二〇一七年二月でめでたく五〇〇回になった。足かけ四一年八月になる。はじめたときは二十代の若者だったべくも、もう七十代の老年に入っている。

五〇〇回を記念して、「二十一世紀を読む」というテーマで、自分が気になった本をとりあげ、短評を書き、それを批評しあうという作業をいまやっている。最終的には、その短評を集めて、簡単なブックレットにしようという試みになる。

## \* バッチこい、絶望

その第五〇一回評論研究会(7.3.25)のとき、井上征剛が、有沢佳映『かさねちゃんにきいてみな』(講談社 13年5月)について論じた、「バッチこい、絶望」がおもしろかった。「バッチこい」も「絶望」も、井上の造語ではない。有沢

の作品中に出てくることばたちだ。「絶望」は物語のはじめに、語り手であるユッキーの絶望として出てくる。「バッチこい」の方は物語のおわりに、かさねちゃんのことばとして語られる。言うなれば、「絶望」にはじまり「バッチこい」におわるこの物語を、井上は、「バッチこい、絶望」と論じた。

ユッキーの絶望から見てもみよう。

班長のかさねちゃんを先頭に、ミツとのんすけ、太郎次郎、マユカ、リュウセイ、で、副班長のオレ。金曜までオレとリュウセイの間にいたミサが一人ぬけただけなのに、なんかすげえ列が短くなった感じで、まるでちがう。

でもちがって見えるのは、おれが絶望してるせいかもしれない。

来年のオレに絶望してるせいかもしれない。